

久留米大学

比較文化研究所年報

第3号

2009

比較文化研究所年報 第3号 (2009年度)

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告	
1. 研究部会報告	
1) 欧州研究部会	5
2) 外国語教育研究部会	6
3) 健康文化研究部会	7
4) 地域博物館研究部会	9
5) 福祉コミュニティ研究部会	13
6) 文化財保存科学研究部会	15
7) 民事法研究部会	16
8) 地域社会・文化・経済研究会	16
9) 地域精神保健福祉部会	18
2. 筑後川流域圏の総合研究 (旧三潆地域研究)	20
3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」	21
4. 研究員発表会	22
5. 日誌 (運営会議、研究所会議等)	25
施設・設備	26



は じ め に

比較文化研究所長 浅見 良 露

2008年度に比較文化研究所年報を発刊して、今年度で第3号になります。毎年前年度の比較文化研究所の活動状況を報告し、また、多くの方々に比較文化研究所を知っていただく目的で発刊しております。

比較文化研究所は、1987年に設立以来、2007年に20周年を迎えました。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学院比較文化研究科の研究機能を受け持ち、所員もまた、専任所員および大学院比較文化研究科後期博士課程教員に限られていましたが、近年は、大学での研究成果の地域や社会への還元が求められる中、2006年度に「筑後川流域圏の総合的研究」を、2007年度に、文部科学省私学振興高度化事業である社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康と生きがいのあるまちづくりを中心に～」をスタートさせ、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図っております。

第3号は、2009年度の活動状況を中心に掲載しております。本年報を通じて、比較文化研究所と地域や社会との交流・連携がさらに広がることを期待します。

2011年3月

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院博士課程比較文化研究科後期課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（当時、現在の比較文化研究科長にあたる）が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も、大学院担当教員を中心に、その他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究(大川研究)」を開始しました。2006年度～2007年度においては、大川地域における研究が行われ、2008年にその第1回の研究報告書「大川地域研究」を発刊しました。また同時に、大川市における報告会も開催いたしました。2008年度～2009年度においては、研究対象地域を旧三潴郡に移して、「筑後川流域圏の総合研究(三潴研究)」さらに研究を進め、2010年に第2回の研究報告書「三潴地域研究」を発行いたしました。そしてさらに、2010年度からは、旧久留米市を中心とした地域の研究に着手しております。

また、文部科学省が進めている私立大学学術研究高度化推進事業のなかで社会連携研究推進事業に、比較文化研究所は大型研究プロジェクト「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究－健康生きがいのあるまちづくりを中心に－」（代表保坂恵美子、研究分担者15名、研究期間5年間）の申請が認められ、2007年度からスタートしました。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。平成21年度においては、次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長 浅見良露（経済学部教授と兼任）

専任所員 行實鉄平（講師）

大西 良（講師）（10月1日より）

客員教授 鈴木 廣

森 醇一郎

所 員 77名（専任所員2名（上記）、

客員教授2名（上記）、

大学院比較文化研究科後期博士課程の教員32名、
大学院心理学研究科後期博士課程の教員6名、
任意に加入する助教以上の教員35名)

特別研究員 2名

研究部会研究協力者 4名 (文化財保存科学研究部会4名)

研究員 35名

専任所員は、講師以上の教員となり、任期制をとっております。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2009年度における研究部会は以下の通りです。また、各研究部会の研究活動を次項以下に示します。

- 1) 欧州研究部会 (部会長 児玉昌己 教授)
- 2) 健康文化研究部会 (部会長 満園良一 教授)
- 3) 外国語教育研究部会 (部会長 李 偉 准教授)
- 4) 福祉コミュニティ研究部会 (部会長 保坂恵美子 教授)
- 5) 民事法研究部会 (部会長 石川真人 教授)
- 6) 文化財保存科学研究部会 (部会長 狩野啓子 教授)
- 7) 地域博物館研究部会 (部会長 吉田洋一 准教授)
- 8) 地域社会・文化・経済研究部会 (部会長 大矢野栄次 教授)
- 9) 地域精神保健福祉研究部会 (部会長 辻丸秀策 教授)

研究員は、後期博士課程を修了した者が、その後も研究を続け、博士の学位論文の作成を目指すというものです。2009年度は、33名の研究員が在籍しており、指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

議 決

比較文化研究所における議決組織として、主として次の2つの議決組織があります。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長、所員の代表からなる組織で、2009年度は合わせて16名の運営委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な議決機関となります。

研究所会議：所長、専任所員、所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する決定を行います。

また、学部などとの必要な連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、学部長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されています。

おもな活動

比較文化研究所の活動は、研究部会の活動および研究所の活動に分かれます。

本年度の活動については次項以下を参照ください。

研究成果の公表

『比較文化研究』

研究所の紀要として『比較文化研究所紀要』第 1 輯を 1987 年に発行しましたが、その後 1993 年発行の第 14 輯からは『比較文化研究』と紀要名を改称しています。また、平成 21 年度より、査読制を取り、また、年 1 回の発行となっております。第 44 輯の目次は以下の通りです。

『比較文化研究』第 44 輯（2010 年 3 月発行）

- | | |
|-------|---|
| 論文 | 大矢野栄次「有明海と淡海　－近淡海と遠淡海－」 pp.1-25 |
| | 大西　良「不登校生徒へのソーシャルワーク的介入に関する研究　－スクールソーシャルワーカーの役割評価を中心に」 pp.27-47 |
| 研究ノート | 田中孝明「福祉サービスの組織運営に関する基礎的研究　－施設運営をめぐる近年の動向を踏まえて－」 pp.49-60 |

各研究部会等の研究成果の公表

また、各研究部会などにおいても出版物をはじめとする研究成果の発表が行われておりますが、それらの成果については、各研究部会等の報告（後述）をご参照ください。

さらに、研究員については、平成 18 年度から、年度末の 2 月に、研究員研究発表会を行い、その年度における研究成果の発表が行われています。

『比較文化研究所年報』の刊行

比較文化研究所における 1 年間の研究成果の報告および比較文化研究所の学外への周知を目的に、2008 年度（2007 年度の報告）より刊行を開始しました。

筑後川流域圏の総合研究（三潴研究）

久留米大学は、筑後川流域圏の中央部に位置するが、久留米大学の位置する筑後川流域圏を研究し、さらにその成果を地域に還元しようとするものです。本研究は 2006 年度より開始しています。現下のところ、下流域から上流域へ 2 年単位で研究を進めております。2006～2007 年度においては、筑後川河口付近の大川市を中心とした地域を対象とし、2007 年度末に『大川地域研究』を刊行しました。2008 年度は、研究対象地域を、筑後川を少しさかのぼった旧三潴郡（久留米市三潴町、久留米市城島町、三潴郡大木町）を中心とした地域を対象に、研究を進めております。2009 年度末に、その成果をとりまとめ、報告書『三潴地域研究』を刊行しました（詳細は別項参照）。

社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康生きがいのあるまちづくりを中心に～」

大学と地域社会との連携を目的として、2007 年度より、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業としてスタート、2009 年度においては、「つなごう！ふるさとの文化」をテーマに、地域の教育、文化、まちづくり団体との交流研究を行い、「ふるさとの文化」をテーマとした「ゆにばひろば」を実施しました。（詳細は別項参照）。

活動報告

1. 研究部会報告

1) 欧州研究部会

2009年度の欧州部会は特に講演活動に重点を置いた活動を行った。

以下の要領で、4名の講演者を招き、会場：久留米大学福岡サテライト（福岡県福岡市中央区天神1-1-1 東オフィス5階）で実施した。

特に辰巳浅嗣先生は阪南大学の学長で多忙にもかかわらず大阪よりお越しいただいた。また佐瀬昌盛防衛大学名誉教授も鎌倉より本学欧州部会のために快く講演を引き受けて頂いた。

朝日協阪紀行論説委員、山本直北九州市立大学准教授についても、同様である。併せて本誌を借りて、感謝申し上げたい。

日 時：平成21年7月24日（金）

講 師：協阪 紀行朝日新聞社論説委員・（元ブリュッセル支局長）

演 題：「欧州とアジアの地域統合ーその比較」

略 歴：京都大学卒

国内各支局、ブリュッセル支局をへて現職

著 書：『大欧州の時代』（岩波新書、2006年）

翻訳書：カトゥリ・メリカリオ協阪紀行訳『平和構築の仕事；フィンランド前大統領アハティサーリとアチェ和平交渉』明石書店、2007年

日 時：平成21年12月5日（土）

講 師：辰巳 浅嗣

「EUの軌跡ー共通外交・安全保障政策（CFSP）を中心に」

（阪南大学学長、日本EU学会理事長、法学博士）

略 歴：昭和47年3月 関西大学大学院公法学専攻博士課程

業 績：『EUの外交・安全保障政策ー欧州政治統合の歩み』（学位論文）成文堂、平成13年3月

『国際関係と国際組織』（共編著）成文堂、平成15年6月

『EU欧州統合の現在』（編著）創元社、平成16年4月

『リスボン条約による欧州統合の新展開』（共著）ミネルヴァ書房、平成21年8月

日 時：平成22年2月13日（土）15時～17時

講演者：佐瀬 昌盛（防衛大学校名誉教授）

演 題：『NATOと日米同盟－その比較－』

『NATO－21世紀からの世界戦略』（文春新書、1999年）

『集団的自衛権——論争のために』（PHP新書、2001年）など多数

翻訳書：『ヴィリー・ブランド共存の試練』（時事通信社、1965年）

『コンラート・アデナウアー 『アデナウアー回顧録（1・2）』（河出書房、1968年）

など多数

日 時：平成22年3月19日（金）

「EUリスボン条約と人権保障の実際」

本学比較文化研究所欧州部会では、EUの人権研究で業績を上げられている。

講 師：山本 直（北九州市立大学外国語学部准教授）

略 歴：（やまもと ただし）1972年生まれ。1995年同志社大学法学部卒業、2004年同大学院法学研究科単位取得。北九州市立大学外国語学部講師、テュービンゲン大学（ドイツ）政治学研究
所客員研究員などを経て、現職

著 書：『EUとグローバル・ガバナンス』（共著、早稲田大学出版会、2009年）、リスボン条約による
欧州統合の新展開－EUの新基本条約（ミネルヴァ書房、2009年）、EU欧州統合の現在（創
元社、2008年）「EU基本権憲章における『解説文』の作成と意義」『公益学研究』9巻1号、
2009年、「EUにおける人権と民主主義」『日本EU学会年報』22号、2002年など

（文責 児玉 昌己）

2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文
学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い
課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2009年度は、上述した視点から、また2008年度の「持続可能な社会と教育：ESDを通じた教育の
捉え直し」を踏まえて、第2弾として「ESDとエコロジカル・フットプリント」をテーマとする講演
会を実施した。講師としてESD-J・岡山ユネスコ協会池田満之理事にお願いした。参加者は本学教員
及び学生計17名であった。

演 題：ESDとエコロジカル・フットプリント

講演者：池田 満之（ESD-J・岡山ユネスコ協会）

日 時：平成21年11月28日 土曜日 10：00～13：00

場 所：久留米大学御井キャンパス メディアセンター6F 第2AV教室

講演内容：

エコロジカル・フットプリント（EF）をテーマにして、持続可能な社会づくりのための教育（ESD）
を学び合う。EFとは、「人間活動が地球環境を踏みつけにした足跡」という比喻に基づいた、地球の

環境容量指標である。通常は、生活を維持するのに必要な一人当たりの陸地及び水域の面積として示される。今回のセミナーでは、ESDを枠組みとして、EFの考え方や実践、そして教育現場での応用例などを伝えと共に、参加型ワークショップを通して、EFから私たちは将来のために何を優先して為すべきなのかなどを考える機会にできる。

(文責 李 偉)

3) 健康文化部会

《活動報告》「医療文化史からみた筑後地域における医学史の比較研究」

今年度(平成21年度)からの健康文化部会は、「筑後地域の医療文化史」を扱う。2008年に80周年を迎えた久留米大学は九州医学専門学校の創設以来、地域医療を担ってきた。しかしながら、県南(あるいは久留米)地域における医療史・医学史が必ずしも明確に把握されてはいない。一方、大学の持つ史・資料は地域を始めとした一般への公開を求められつつある。久留米大学も、県南(あるいは久留米)地域における医療史・医学史を考慮しながら、地域医療を担ってきた史・資料を一般へ公開出来るか、出来るとするならば如何に、どのようにして行うか、について検討すべき時期にきている。久留米大学の方向性とシステムを模索することを目的に、大学付置附置の博物館、資料館などに関する資料収集と視察を実施した。その施設と概要などは、以下に列記した通りである。

1. 4月3日(木)：明治薬科大学明薬資料館

資料館の位置づけ(図書館の一部)、役割などについて確認した。なお、日本における西洋医薬と大学の沿革に、医薬分業の必要性が伺われる。

2. 4月3日(木)：順天堂大学医学部

近代医学の発祥地として佐倉順天堂の詳細を紹介して貰うと同時に、医学史のシンポジウム開催など情報発信などの企画は見逃せない。

3. 4月11日(土)：川崎医科大学現代医学教育博物館

医師を始め医療従事者における医学、医療の教育目的として、資料がかなり充実している。大学としての歴史が必ずしも古くないことから、博物館の目的を医学教育に絞り、一括的に整理された病理標本の充実ぶりが著しい。

4. 4月12日(日)：大阪人権博物館

人権を考慮しなければならない医学・医療の歴史を考慮する上で、ハンセン氏病や障害者などの人権問題は参考になった。

5. 4月30日(木)：富山大学民族薬物資料館

和漢を始めとした様々なアジア系民族の薬物が極めて豊富であり、印象深い(年間で約500種前後の追加があるらしい)。和漢医薬学総合研究所、民族薬物研究センターの資料館に位置づけられる。博物館的な機能は、データベース化されたものとして、HPに集約されていた。なお、人的組織構成は教員2人と、データベース作成担当を含む事務官2人の計4人であった。

6. 5 月 1 日（金）：内藤記念くすり博物館

植物園を併設した博物館は最大規模で、その展示は、薬の考え方、作り方、売薬を含む社会的位置づけなど古代から時系列的に分かりやすい。また、健康の体験コーナーや医学（教育）との関係性も垣間見え、一般人の見学も地理的に遠いにも関わらず多かった。なお、人的組織は館長以下、学芸員 2 名、事務員 5 名、園庭員 3 名の 11 人体制で、定期的な「くすり博物館だより」なども目を引いた。

7. 5 月 22 日（金）：日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館

歯科や薬学にまで及ぶ医学書の古典（主に原書）が、医学の歴史に沿った展示で、欧米の初期における歯科の治療状況を歯科医や器具も含め複製品・物で再現してあった。我が国については、用器具の展示や絵による紹介である。なお、人的組織構成は館長と係員、1 名ずつの専従であった。

8. 5 月 23 日（土）：新潟大学あさひまち学術資料展示室

新潟大学が保有する資料のなかで、大学の医学史は第一解剖学教室の古人骨資料と、人文学部の考古資料の組み合わせだった人類史関係と、歯科医療の近代史であった。

9. 9 月 14 日（月）：仙台大学体育学部

数少ない体育の単科大学ながら、スポーツ医学に取り組むインフラの充実ぶりが目立つ。

10. 9 月 15 日（火）：東北大学総合学術博物館

東北大学総合学術博物館は、理学部自然史標本館が東北大学総合学術博物館の常設展として機能していた。過去に蓄積してきた自然史に関する標本の充実ぶりが著しい。

11. 10 月 5 日（日）：東北大学マルチメディアホール

東北史学会・大学院 GP「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」合同国際シンポジウム『文書館・博物館のこれからとアーキビスト・キュレーター養成』に出席した。

12. 1 月 8 日（金）：東京大学総合科学博物館

東京大学総合科学博物館は、全学の共有財産であると同時に 100 年以上にわたって存在する学術標本を整理し、そのまま常設展として機能させていた。

13. 1 月 8 日（金）：東京大学総合科学博物館小石川分館

本郷にあった東京医学校の中心建築を移築再建した小石川分館自体が、重要文化財である。一見、医学、自然、工学、建築などの雑多な展示とも捉えかねない。併設された江戸時代小石川養生所の痕跡を残す広大な植物園は、存在そのものが時代を感じさせた。

14. 1 月 22 日（金）：仙巖園尚古集成館

尚古集成館は、幕末から明治にかけた鹿児島県の医学校の歴史も刻んでおり、実学としてのイギリス医学に範を取った唯一の歴史を見せていた。また、鹿児島にしかない薬草の歴史などの一端も副館長から仄聞出来た。

15. 1 月 22 日（金）：鹿児島大学総合研究博物館

全国の地方大学で初めて設立された総合研究博物館は、建物自体で 80 年以上の歴史を持つ。七高造士館、高等農林の歴史から戦後の新制大学としてスタートした展示は、機器で辿る教育研究史、地理と生物の地域史など付属中央図書館歴史展示室とともに詳しい。なお、人的組織は教官 4 名（教授 1 名、准教授 3 名）と非常勤の学芸員 1 名（博物館常駐）、事務の専従職員に各学部で協力（連絡）教官と言う構成であった。

上記の視察、調査に加え、医学史全般の現状について講演会を企画していたものの、予定していた演者の辞退につき実現出来なかったが、平成22年度の課題としたい。また、久留米大学医学部の前身である九州医学専門学校OBに、様々な医療の道具・用具などの聞き取りを行った。今後、医学部付属病院に残されたものについても、確認しながら整理していきたい。

(文責 満園 良一)

4) 地域博物館研究部会

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持し地域文化を継承していくことを目的とする。

運営（研究）計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
- ③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2009年度の活動報告の一例として、ニュースレター（vol.1）を発行した。

地域博物館研究部会ニュースレター CONTECTS

大学博物館の構想査定と将来的役割	森 醇一郎
レポート	
社団法人スポーツ健康産業団体連合会シンポジウム	行實 鉄平
村丸ごと生活博物館（熊本県水俣市久木野）	浅見 良露
古文書調査（大木町）	吉田 洋一
寄稿 九州の図書館・博物館①（熊本県立大学図書館）	大島 明秀

以下、ニュースレターの一部を転載致します。

(文責 吉田 洋一)

NEWSLETTER 2010 Vol.1

大学博物館の構想策定と将来的役割

久留米大学比較文化研究所客員教授 森 醇一郎

九州一の大河「筑後川」の流れによって流域に形成された地理的環境は、中国大陆と朝鮮半島に近接することから多様な文化を生み育み、特色ある歴史的環境をつくってきました。久留米大学はこの大河の流れの中で開学以来 80 年の時を刻み、今日旭町キャンパスと御井町キャンパスから構成される大学像を創りあげています。しかし、大学の中に過去の研究成果や、そこから生まれた教育的成果を知ることを目的とした系統的な情報を、広く学内や地域に提供するデータベースの「大学博物館」は現在存在していません。

そこで久留米大学の研究と教育による「大学力」を情報化し、今日の学園をとりまく地理的・歴史的環境の地域情報を発信する施設の設立案を提案することを目的とした、「地域博物館研究部会」が平成 18 年度に比較文化研究所の中に開設されました。久留米大学をふくむ筑後川流域の将来計画策定の中で、どのような「資料」の収集と、収集された各種資料の「調査研究」の成果を「情報」として還元できる拠点施設の「大学博物館」と「地域博物館」を 3 年間かけて検討してまいりました。

今日、九州各地では市町村合併や行財政改革が推進され、道州制度の導入等の社会の構成基盤の根幹に関わる変化が求められている中で、大学博物館の設立目的と役割を「大学の総合的なデータベース」としてその位置付けを明確にし、博物館を手段とした文化・広報活動の構築による大学の地域戦略の手段として不可欠な施設と考え、その必要性を説いています。そこから①オープンキャンパスの常設化による大学情報の発信、②寄贈・寄託資料の受け入れによる積極的な文化・広報活動の導入、③文系及び医系学部の博物館を整備することによりデータベースの構築による創造的な人材の育成等が考えられます。このような大学総合博物館構想の構築と整備による結果として、国内外の学生の獲得のための吸引力の強化や創造的な人材の育

成による大学総合評価の向上、さらには多様な人材の交流による学際的研究効果による大学力の向上に繋がるものであります。

比較文化研究所博物館研究部会の「久留米大学総合博物館（仮称）」の構成案として大学の発展過程から、文系博物館と医系博物館の二系統と大学博物館さらには大学周辺に点在する地域博物館の今後の管理・運営を行う博物館管理機構を設けた三系統としました。

文系博物館には 365 日オープンキャンパスの役割を持つ「開学 80 周年記念館」と、博物館講座と学芸員養成課程の実習や九州の地域博物館の情報を提供する「九州の博物館情報館」を中心に、大学に寄贈・寄託される資料を公開する「ギャラリー館」、大学が置かれている歴史的・地理的環境から中国大陆と朝鮮半島を対象にした「比較文化研究館」、大学を取り巻く筑後川流域の歴史と風土を展示する「流域博物館」等が考えられます。

医系博物館には人々の生命に関係する総合展示として「生命の科学館」や、医学部の 80 周年の歴史と現在の教育課程を示す「医学部講座科目館」を中心に、医学研究の応用施設の「附属病院診療科目館」、医学研究の最先端を紹介する「先端医学館」、現代社会が目標とする健康維持のための「健康とスポーツ医学館」等が考えられます。

このように、久留米大学総合博物館は文系が 5 館（室）と医学系 5 館（室）から構成される構想案ではありますが、取り組みやすい施設から着手し、また短期間で完成させるものではなく長期計画の中で達成されるものであります。



レポート

社団法人スポーツ健康産業団体連合会シンポジウム

行實 鉄平 (比較文化研究所)

平成22年3月3日(水)、社団法人スポーツ健康産業団体連合会が主催するシンポジウム「スポーツは地域の未来を招く～スポーツを起爆剤とした地域の活性化～」へ参加した。内容は、スポーツツーリズムの可能性について溝畑宏氏(国土交通省 観光長官)の基調講演をはじめ、各地域での実践報告、ならびにパネルディスカッションが行われたものであった。ツーリズム産業は、小泉内閣時に政策として取り上げられ、それ以降、2006年「観光立国推進基本法」の制定、2008年「観光庁」の設置と、現在その育成が日本の基幹産業のひとつとして進められているものである。その中で「健康(ヘルス)」というキーワードを含めたスポーツ・ヘルスツーリズムは、多彩な湯治文化を持つ日本において、今後の地域産業として大きな潜在的需要を持つものであるといえよう。また、市民マラソン大会をはじめとした各地域で行われるスポーツイベントの開催は、その地域にもたらす経済効果ばかりが注目されがちであるが、行政やスポーツ関係団体、まちづくりNPO、地場産業などとのネットワーク、といったレガシーを生み出すことにも注目する必要がある。逆に、このようなネットワークづくりに注目していく(意識していく)ことが、スポーツと地域の活性化を結びつける源泉であることを、今回の議論を通して再認識することができた。

現在、久留米大学において進められている博物館構想においても、「健康・スポーツ」は1つのキーワードとなっている。これからの博物館を構想していく際にスポーツがどのような形で活かされるのか、地域と共に発展する久留米大学という視点も含め、今後、研究部会の中で検討していきたい。

*社団法人スポーツ健康産業団体連合会 http://www.jsif.or.jp/index_flash.html



村丸ごと生活博物館(熊本県水俣市久木野)

浅見 良露 (経済学部)

本博物館は通常の博物館ではなく、エコミュージアムの一つである。エコミュージアムは、一つの建物内に収集品を展示するのではなく、地域そのものが博物館であり、訪問者が現地に出向いていて、地域そのものを見聞するものである。日本においては、「まるごと博物館」などの名称で、多くの地域で開館している。

水俣の「村丸ごと生活博物館」は、水俣市が2001年に「水俣市元気づくり条例」に基づき設置、現在、山間部の4地区(頭(かづめ)石、久木野、大川、越小場)が指定を受けている。これらのうち、久木野は、水俣市中心部の東方(山間への方向)約13kmの位置にあり、2005年に「村丸ごと生活博物館」に指定を受けている*1。拠点となっている愛林館は、1994年に水俣市によって建設された。当初から館長を全国公募し、沢畑亨氏が館長に選ばれ、現在に至っている。久木野地区の村おこし活動の拠点となっており、その一環として、「村丸ごと生活博物館」を開館している。

愛林館の活動は、「食べ物」「環境教育」「イベント」の3つの事業を柱とし、「環境教育」の中で、「森づくり」「田舎計画」「研修」「村丸ごと生活博物館」「炭焼き」の事業を行っている。

「村丸ごと生活博物館」は、愛林館を拠点とし、2009年11月現在、8人の「生活学芸員」と6人の「職人」が活動している。生活学芸員は、料理班と案内班からなり、案内班は、来訪者を村中(場合によっては農家内)まで案内し、地域の生活そのものを紹介してくれる。その中で、訪問者は、農村地域にあるいろいろなもののほか、農村での生活も知ることができる。料理班は、愛林館において、農村における家庭料理の提供やレシピの出版を通じて、農村の家庭料理を記録に残している。

「村めぐり」「食めぐり」「わざめぐり(各種体験)」について、それぞれ訪問料金を設定し、その活動が村のビジネスにつながるようにしている。

*1 村丸ごと生活博物館ホームページ

http://www.minamatacity.jp/related_group/muramaru_group/index.htm



古文書調査

比較文化研究所の研究部会のひとつに「筑後川流域圏の総合研究」があります。筑後川周辺の各自治体にご協力いただいて、経済、社会、地理、歴史など様々な分野を各々の専門教員が担当しています。平成18年度より筑後川河口から開始された研究は、19年度末に『筑後川流域圏の総合研究1 大川地域研究』という冊子にまとめられ、新聞にも取り上げられました。

さて、20・21年度は大川市より上流に位置する大木町、三瀬町・城島町(2町は現久留米市)の総合研究を行っています。その一環として、文学部吉田ゼミでは、大木町の古文書所在調査を実施いたしました。写真は同町の牟田家に伝わる古文書調査の様子です。詳細は『筑後川流域圏の総合研究2 三瀬研究』に記載予定です。今後も引き続き同総合研究と連携をとりながら、筑後地域で散逸しつつある古文書等の調査を続けていこうと考えています。

吉田 洋一 (文学部)

▶ 調査の様子



▶ 牟田家史料の部屋



NEWSLETTER 2010 Vol.1



九州の図書館・博物館 ①

熊本県立大学学術情報メディアセンター図書館

熊本県立大学文学部専任講師 大島 明秀

本学は、昭和22年（1947）熊本城内に開学した熊本県立女子専門学校をその前身としています。昭和25年に大江渡鹿に校舎を移し、さらに昭和55年（1980）には現住所（健軍町水洗、現月出）に移転しました。平成6年（1994）に熊本県立大学と改名、共学化し、その後、法人化を経て現在に至っています。

現図書館は共学化の際にキャンパス内で移転改築したもので、RC造4階建て総延床面積3,847㎡、図書約26万冊、視聴覚資料約7,700点を所蔵しています（図1）。



（図1）図書館の外観

1～3階が開架書庫、4階が閉架書庫となっていますが、1階は特に、視聴覚コーナー（14ブース）を設けてDVDプレーヤーやビデオレコーダー等34台を備え付け、学生の語学学習や就職対策のための学習に供しています。2～3階には学生・教職員が普段利用する和洋書を配架しています。また、平成20年には本学の大学史料を展示した「熊本県立大学アーカイブ」が開設されました（図2）。



（図2）熊本県立大学アーカイブ

3階にはグループ学習室2室・会議室1室も備えています。また、地域に根差した大学図書館として、熊本の郷土研究に資する文献の収集と目録作成も行っています。

上記のほか、図書館4階「特別資料室」には数千点以上の貴重史料が保管されています。一例を挙げると、『熊本市史』を編纂した平野流香（1883-1950）の関係文書、肥後地域の版本・写本を収集した郷土史家上妻博之（1879-1967）旧蔵書約440冊、そして熊本洋学校（明治4・1871年開校）で教科書として用いられたと語られる蔵書64冊などです。

中でも、近代熊本を語る上で最重要史料とされる上益城郡の豪商富永家に関する文書群を収蔵していることは、とりわけ強調したい点です。富永家が営んでいた醸造業に関連する文書類をはじめとして、證書類、書簡類、公文書類、家族や個人的な記録類など総計7000点以上が収められています。特に注目すべきは、明治10年代から約30年にわたってつけられた富永三十郎（1829-1910）の日記で、そこには天候、時代、世相、年中行事、食事の内容、出来事、校友関係、物品の購入記録などが詳細に記録されています（図3）。



（図3）富永三十郎の日記

現在、利用者への提供を目指し、文学部日本語日本文学科の学生とともに月1-2回のペースで、解読困難なこの文書群の整理・目録化に取り組んでいます。九州における富永家の位置づけからすれば、史料整理が進めば間違いなく久留米との接点が見出されることになるでしょう。研究を希望される勇敢な学生が、久留米から出現される日が来ることを願ってやみません。

5) 福祉コミュニティ研究部会

平成21年度福祉コミュニティ研究部会では、以下の2つの研究・活動課題に取り組んだ。

研究・活動課題名

- (1) 高良山物語『こうご石はみてござる』の絵本に対する調査研究活動
- (2) 新型特別養護老人ホームの現状と課題に関する研究活動

以下に、この2つの研究・活動課題の成果についてまとめる。

(1) 高良山物語『こうご石はみてござる』の絵本に対する調査研究活動

① 目的

昨年度（平成20年度）、地域の歴史や文化に対する理解および家族や地域の絆を深め、子どもたちの地域アイデンティティ形成の一助とするために、地域に伝わる民話を素材にした絵本高良山物語『こうご石はみてござる』を作成した。そこで今回、高良山物語『こうご石はみてござる』に対する地域住民の意見や感想などを具体的に把握するべくアンケート調査を実施した。

② 研究委員

保坂 恵美子	久留米大学文学部教授（研究委員長）
松尾 誠治郎	久留米大学文学部教授
石橋 潔	久留米大学文学部准教授
小栗 正裕	久留米大学文学部講師
大西 良	久留米大学比較文化研究所所員
ポドリヤク ナタリヤ	久留米大学大学院比較文化研究科学生
許 莉分	久留米大学大学院比較文化研究科学生
藤島 法仁	久留米大学大学院比較文化研究科学生
川野 栄美子	ブッククラブ大川代表

③ 研究委員会開催日

平成21年 6 月15日（月）	第 1 回研究委員会	研究計画の検討
平成21年 7 月13日（月）	第 2 回研究委員会	研究スケジュール・手続きの検討
平成21年 8 月10日（月）	第 3 回研究委員会	研究報告①
平成21年 9 月14日（月）	第 4 回研究委員会	研究報告②
平成21年10月19日（月）	第 5 回研究委員会	研究報告③
平成21年11月 9 日（月）	第 6 回研究委員会	研究報告④
平成21年11月30日（月）	第 7 回研究委員会	研究報告⑤
平成21年12月14日（月）	第 8 回研究委員会	研究報告⑥

平成22年 1 月18日（月） 第 9 回研究委員会 研究のまとめ

④ 活動報告

本調査によって、絵本による地域文化の伝承に対して地域住民は共感と強い期待を抱いていることが明らかとなった。また、今後の絵本の読み聞かせに関して、地域住民の意見や要望を広くとり入れることにより、住民に受け入れやすい文化創造が可能となり、ひいては地域アイデンティティを深化させたまちづくりにつながっていくことが示唆された。

(2) 新型特別養護老人ホームの現状と課題に関する研究活動

① 目的

高齢者は、住み慣れた地域社会から切り離され、入所施設での集団生活を余儀なくさせる施設サービスについての見直しが盛んに進められている。そのような中、従来の特別養護老人ホームに代わって、小規模生活単位型と呼ばれる新型特別養護老人ホームが注目されている。そこで今回、今年（平成21年）の4月から稼働している新型特別養護老人ホームの視察および施設職員へのインタビューを通じて、新型特別養護老人ホームの現状と課題を明らかにすることを目的とした。

② 研究委員

保坂 恵美子	久留米大学文学部教授（研究委員長）
松尾 誠治郎	久留米大学文学部教授
石橋 潔	久留米大学文学部准教授
小栗 正裕	久留米大学文学部講師
大西 良	久留米大学比較文化研究所所員
ポドリヤク ナタリヤ	久留米大学大学院比較文化研究科学生
許 莉分	久留米大学大学院比較文化研究科学生
藤島 法仁	久留米大学大学院比較文化研究科学生
川野 栄美子	ブッククラブ大川代表

③ 研究委員会開催日

平成21年 9 月28日（月）	第 1 回研究委員会	研究計画の検討
平成21年10月26日（月）	第 2 回研究委員会	研究スケジュール・手続きの検討
平成22年 1 月25日（月）	第 3 回研究委員会	事前勉強会
平成22年 2 月22日（月）	現地視察	
平成22年 2 月25日（木）	第 3 回研究委員会	研究のまとめ

④ 活動報告

本研究から、施設職員からみた従来の特別養護老人ホームと新型特別養護老人ホームの相違を明ら

かにすることができた。特に、小規模生活単位による介護職員の仕事上の負担の問題が浮き彫りになり、利用者の立場と施設職員の立場の双方向からの検討が必要であることが分かった。

(文責 保坂 恵美子)

6) 文化財保存科学研究部会

2009年度活動記録(主要項目のみ。部会員は敬称省略)

4月、文化財保存科学研究部会の実験室として100号館1階の部屋の使用が許可された。

上宮健吉がクララ種子の発芽テスト、前年度のポット苗の試栽培を開始。

5月5日、狩野がローマでマリア・ヴェーラさんと面会。

松枝哲哉氏・松枝小夜子氏・溝田俊和氏・溝田直美氏が研究協力者として承認された。

上宮がザウテルシバンムシ羽化成虫による防虫実験を開始。

八女の近藤早苗氏栽培のクララ苗を松枝哲哉氏の仲介で田主丸の水田跡に30本移植。

近藤氏提供の4年生2本、3年生1本を茎、芯髄、韌皮にわけて抽出。

6月9日、上宮と狩野が、筑邦銀行の西村氏、松田氏と八女伝統工芸館、溝田和紙を訪問。

その後、2名で藍生庵(松枝哲哉氏宅)を訪問。

13-14日、狩野が倉敷で開催された文化財保存修復学会に出席。

17日、上宮、ザウテルシバンムシ5ペアを人工飼料で飼育開始。

21日、上宮、狩野が、松枝小夜子氏と3名で中野三敏氏を訪問。

27日、定例研究会。

7月3日、上宮が中野三敏氏宅で、古書害虫の発生調査。防虫試験のサンプル回収。

7日、溝田俊和氏、クララ和紙75枚納品。

8月1日、定例研究会。

9月10日、企画課の有馬氏、江上氏と藍生庵を訪問。

12日、上宮が、九州国立博物館主催平成21年度文化庁美術館博物館活動基盤整備支援事業による「市民と共に ミュージアムIPM」研修・ワークショップで講演。

26日、狩野が、九州国立博物館の上記研修会に参加。

10月14日、上宮が、中野三敏氏提供の古書絵巻から1~2齢幼虫を採取し、幼虫1齢15頭、2齢10頭を飼育し、コクゾウコバチの成虫メス6、オス4頭を放飼。古書の害虫の天敵寄生蜂の開発に着手。

30日、狩野が近藤早苗氏、松尾茂美氏、溝田義秋氏、中原稔弘氏と面会。ビデオ撮影の依頼と打ち合わせを行う。

11月28日、九州国立博物館、「市民と共にミュージアムIPM」シンポジウムと交流会に参加。

12月1日、定例研究会。松尾茂美氏、溝田義秋氏、松尾智明氏、中原稔弘氏のご協力により、八女手漉き和紙伝統製法のビデオ撮影を実施。撮影終了後、交流会。

12日、大沼雅明、上宮、狩野、松枝小夜子氏の4名で、多久歴史資料館収蔵の藩文書の染色和紙調査を実施。

1 月 研究部会作成のビデオのチェック作業を行う。

2 月 27 日、桑野剛一「久留米餅をつくる藍菌」と題して、久留米餅保存協会主催の講演会で講演。また、同日、継続開催した定例研究会に、東京藝術大学の稲葉政満教授を招聘して「生紙と染色」と題する講演をしていただいた。

3 月 書家の松田朴田氏に「筑後優品」のロゴを依頼。

28-29 日、上宮、文化財虫害研究所等で資料収集。

(文責 狩野 啓子)

7) 民法法研究部会

今年度はここに記すべき活動はなかった。法学部および法科大学院における授業負担の重さ、雑用の多さがその主たる理由である。この状況はこれからも続くと思われるが、学外の研究者・実務家との共同研究も視野に入れて、活動を継続していきたい。

(文責 石川 真人)

8) 地域社会・文化・経済研究部会

平成 21 年度の地域社会経済研究部会の活動報告として、1. 久留米大学学外公開講座（えーるピア久留米）での講座主催、そして、海外（台湾）の大学での講演、国内での講演会について報告することができる。

(1) 公開講座

① 久留米大学公開講座「国際社会と政治・経済」を、6 月 1 日から 7 月 4 日までの毎週木曜日に、久留米大学御井学舎 500 号館 51A 教室において、下記の要領で開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
イスラム諸国の今後	宮原 信孝	文学部教授	6 月 1 日 (日)	久留米大学 御井学舎 500 号館 51A 18:30-20:00
欧州統合の将来	児玉 昌己	法学部教授	6 月 21 日 (日)	
中国・台湾の今後	張 国興	法学部教授	6 月 28 日 (日)	
アメリカ経済の今後	大矢野 栄次	経済学部教授	7 月 4 日 (日)	

② えーるピア久留米において、6 月 14 日から 7 月 5 日までの毎週日曜日に「日本の経済の現状と将来」と題して下記の内容について公開講座を開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
金融危機－アメリカ経済と世界	大矢野 栄次	経済学部 教授	6 月 14 日（日）	えーるピア 久留米 14：00－16：00
中国経済の未来とアジア			6 月 21 日（日）	
ロシア経済とヨーロッパ			6 月 28 日（日）	
世界経済の設計図			7 月 5 日（日）	

③ 久留米大学公開講座「鉄道学講座－日本における鉄道の進化と役割を考える」を、元 J R 九州社長・会長の石井幸孝氏を招聘して10月1日から10月22日までの毎週木曜日に、久留米大学御井学舎500号館51A教室において、下記の要領で開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
鉄道史概論	石井 幸孝	元 J R 九州 社長・会長	10 月 1 日（木）	久留米大学 御井学舎 500号館51A 18：30－20：00
九州の鉄道史			10 月 8 日（木）	
鉄道の未来を考える			10 月 15 日（木）	
J R 九州の終わりなき挑戦			10 月 22 日（木）	
地球温暖化と鉄道	大矢野 栄次	経済学部教授	10 月 29 日（木）	

(2) 国内講演会

国内の講演会としては、耳納市民センターと荒木市民センターにおいて、平成21年4月19日と5月17日に「九州王朝の歴史」の講演会を開催した。

また、平成21年11月15日と12月13日に、耳納市民センターと荒木市民センターにおいて、「マニフェストと日本経済の現状」についての講演会を開催した。

(3) 新幹線物流研究会

本研究会からスタートした「新幹線物流の研究会」が、東京での研究会と福岡県と佐賀県での研究会として拡大・進展している。地球環境問題の関係から内外の関心も深まり、今後の発展を期待している。

《メッセージ》

歴史は古代より鏡¹とされて来た。歴史を見ることで自分や自分たちのまわり、ひいては日本が見えるのである。これまで、日本人が何をしてきたのか、これから、自分たちが何をすべきなのか、日本の鏡を見ることから見えて来ると考えるのである。

邪馬台国が「近畿にあったに違いない」とする研究者や「九州にあったにちがいない」とする研究者にとって、歴史は自己主張の道具かもしれない。しかし、興味本位の研究以上に、歴史研究によって齎されるものは、歴史の真実から得られる知恵である。それは、「あり得ないことが生じうること：ブラック・スワン」、「日本の本質は変化すること」を理解することが重要であるということである。

「世の中が思いもかけない方向に変化すること」、そして、やがて、「世界の中心が移動すること」を理解することであり、「不変と思われた常識が変質する」ということが理解されなければならないのである。

【注】

¹ 白銅や青銅で作り、表面をよく磨いて姿を映すもの。「影見」の意であろうとされる。鏡は古くは極めて神秘的なものとされ、宝器として神事に用いた。(白川静緒「字訓」)

(文責 大矢野 栄次)

9) 地域精神保健福祉部会

本研究部会では、5つの研究テーマを設定して共同研究を行った。以下に研究テーマと発表・報告の一覧を示す。

許莉芬「台湾における外国人花嫁の社会的適応について－識字教育を中心に」『比較文化研究 No.89 2009』

許莉芬「異文化適応からみた在日外国人のメンタルヘルスにかんする研究－久留米大学病院を受診した外国人花嫁の事例を通して」『比較文化研究論集 第21号別刷 2007』

大西良「中学生に対するアンガーマネジメントプログラムの実施とその効果の測定－POMS短縮版を用いた気分変化の検証を中心に」『久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 第17巻 2009』

大西良「不登校事例におけるスクールソーシャルの役割に関する研究－エコマップを用いた生態学的視点からの中心に」『日本社会福祉学会 (口頭発表)』

大西良「不登校生徒へのソーシャルワーク的介入に関する研究－スクールソーシャルワーカーの役割を中心に」『比較文化研究 第44輯別冊』

大西良「不登校事例におけるスクールソーシャルワークの実践－エコマップを用いた役割評価を中心に」『福岡県社会福祉士会 研究ノート』

大西良「スクールソーシャルワーク実践におけるアセスメントシートに関する研究」『第8回日本精神

保健福祉学会（口頭発表）』

梅本直子「久留米市におけるバリアフリー現状と課題」

島崎昇平「ソーシャルキャピタルの概念を用いた高齢者の自殺予防の可能性」

占部尊士「学生同士が互いに成長するチュートリアルモデルの実践－介護福祉士国家試験に向けての新たな取り組みとして」『第17回日本介護福祉学会大会 2009（口頭発表）』

占部尊士「福祉学生の考える高齢者の余暇活動支援とは－福祉学生の記述についての内容分析を中心に」『第23回日本地域福祉学会 2009（口頭発表）』

占部尊士「社会的排除に対する教育的取り組みについて－学生の捉える援助対象者イメージの比較から」『第7回 日本福祉心理学会 2009（口頭発表）』

ポドリヤク・ナタリヤ「ウクライナにおける障害をもつ子どもへのインクルージョン」『比較文化研究 No.91 2010』

占部尊士「施設実習における福祉学生のもつ援助意識の変化－第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ段階ごとの実習前後を比較して」『福岡県社会福祉士会 研究ノート』

占部尊士「福祉学生に対する体験型教育の試み－ホームレス支援を通しての学び」『比較文化研究論集 第24号別刷 2009』

占部尊士「介護福祉実習における学生の意識変化に関する研究－第1段階介護福祉実習前後での検討」『介護福祉学 第16巻第2号 2009』

松永美咲「KUPA活動内容報告－地域連携について」『地域精神保健福祉部会市民フォーラム2010』
(文責 辻丸 秀策)

2. 筑後川流域圏の総合研究（三潴研究）

1) はじめに

2006年度より開始された「筑後川流域圏の総合研究」は、対象地域を「大川」地域とし、2007年度にその研究成果を「筑後川流域圏の総合研究1 大川研究」として報告した。そして、2008年度は、対象地域を「三潴（旧三潴地域である大木町、三潴町、城島町）」地域に移し、現地視察（巡見）の実施や、三潴研究会を開催（主に旧3町の行政担当者を演者としてお招きし、各地域の歴史や文化、施設、最近の取り組み等についてご講演いただいた）した。

本年度は、2008年度の活動を受けて、プロジェクトメンバーがそれぞれのテーマで調査を開始し、その研究成果となる「筑後川流域圏の総合研究2 三潴研究」の発行を目指した。

2) 三潴研究

(1) プロジェクトメンバーと各研究課題

本プロジェクトメンバーは、昨年度に実施した現地視察および研究会を受けて、対象地域に興味・関心を持った9名の教員により構成している。各教員の所属、専門領域および研究課題は下記に示すとおりである。

NO	氏 名	所 属	職 名	専 門	テ ー マ
1	畠中 昌教	経済学部	講 師	観光学概論・エコツーリズム論	酒造業と観光
2	吉田 洋一	文学部	講 師	日本近代史・日本史学概論	三潴地方の近世・近代
3	行實 鉄平	比較文化研究所	講 師	スポーツ経営学・コミュニティスポーツ論	三潴町の地域スポーツ振興とまちづくりの関連性
4	谷口 豊	商学部	准教授	経営史・比較経営論	三潴・城島地区における酒造業の現段階
5	駄田井 正	経済学部	教 授	経済学史・ポスト工業社会論	旧三潴郡地域における自然との共生度
6	浅見 良露	経済学部	教 授	経済地理・観光地理学・地理情報システム論	筑後川下流域における水系網及び土地利用の変化
7	狩野 啓子	文学部	教 授	日本文学・日本近代文学・比較文学	大木町における藍染織の歴史－松枝家を中心に－
8	大矢野栄次	経済学部	教 授	国際貿易論・近代経済学説史・経済政策	筑後川と有明海の歴史に見る帰化人の痕跡
9	堂前 亮平	文学部	教 授	地誌学・人文地理学	旧三潴郡における在郷町の地域変容

(2) 「筑後川流域圏の総合研究2 三潴研究」の発行

本年度は上記プロジェクトメンバーによりこれまでの研究成果を踏まえた報告書を作成する年度となる。現在もこの報告書の執筆→入校中であるが、来年度の4月に完成を目指している。

なお、本報告書の作成後は、対象地域において研究報告会を実施する予定としている。詳細については、後日、インフォメーションさせていただきます。

(3) 今後の展開

2010年度は、対象地域を「三潴」地域より川上に移し、久留米市を中心とした周辺の市町村を含めた左岸地域（筑後川を川上にみた場合）を対象としていく。よって、対象地域が移ることから来年度は、「地域を知る」という意味から現地視察や研究会を数多く実施していきたい。本プロジェクトへの多くの参加を期待したい。（文責 行實 鉄平）



筑後川流域圏の総合研究2
三潴研究 表紙

3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」

第 3 回健康生きがいのあるまちづくり “ゆにばひろば” 『つなごう！ふるさとの文化』

— 筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究 —

久留米大学比較文化研究所では、大学の地域貢献の一環として、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業のもとで、「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康生きがいのあるまちづくりを中心に～」という事業を実施している。本事業は、産学官民協働のシステムづくりと全住民が参加できる「ゆにばひろば（大学ひろば）」づくりを通じて、ヒト・モノ・ココロと情報をつなぎ、地域文化の再生をもって地域の活性化に貢献することを目的としている。

このような目的の実現に向けて、本年度は「つなごう！ふるさとの文化」というテーマで、地域文化の底流ともいえる高良山の神籠石伝説を絵本化して、子どもたちへの絵本の読み聞かせと、読み聞かせを通じた老若男女の世代間交流を実施した。絵本の読み聞かせについては、児童文学作家のたかしよいち氏による講演会、世代間交流については、くるめ市民劇団ほとめき倶楽部の民話芝居「かさこじぞう」や「久留米にわか」（日吉ぎんなん社中久留米にわか保存会）、行政や学生・市民ボランティア等による多彩な「子育て支援コーナー」解説等にてぎわった。

表 1 第 3 回健康生きがいのあるまちづくりの主催・共催・後援団体

事業名称	第 3 回健康生きがいのあるまちづくり（ゆにばひろば） — つなごう！ふるさとの文化
主 催	久留米大学比較文化研究所
共 催	久留米大学文学部社会福祉学科、筑後川流域圏地域づくり何でも相談会
後 援	久留米市、大川市、久留米市社会福祉協議会、久留米市生きがい健康づくり財団、JA くるめ、久留米合川校区まちづくり運営協議会、久留米市御井校区まちづくり振興会、久留米市消費者連絡協議会、久留米市子ども会連合会、NPO 人子育て支援ボランティアくるるん、ブッククラブ大川、くるめ市民劇団ほとめき倶楽部、日吉ぎんなん社中久留米にわか保存会、高良大社、久留米市立中央図書館ブックトークボランティアの会、久留米大学文学部・経済学部・法学部・商学部、久留米大学KOS、久留米大学k-V e c、久留米大学BBS、西日本新聞社、くーみんテレビ



(文責 保坂 恵美子)

4. 比較文化研究所 研究員 発表会

1) はじめに

2006年度よりスタートした当発表会は、本年度で第4回目の実施となりました。本年度は34名の研究員が当研究所に所属しており、当発表会ではその内の19名が発表を行いました（予稿の提出者は28名）。研究員諸氏は、久留米大学大学院（比較文化研究科 後期博士課程）を終え、仕事をされながら研究員として活動している方が多いことから、どうしても当日の発表を行うことができない方が出てきます。しかし、そのような事情の方も本年度に実施した研究成果を予稿集に掲載することで報告しています。予稿集は、比較文化研究所の会議室に残部をおいていますので、ご興味のある方は、ぜひ手に取っていただければと思います。

本年度は昨年度に引き続き2会場で開催しました。平成22年2月15日（月）という平日にもかかわらず、担当教員の先生方をはじめ、各領域の院生といった多くの方々に参加していただきました。また、各会場での質疑応答も活発に行われ、内容のある発表会となりました。



2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日 時 平成22年2月15日（月） 10：00～16：00

②会 場 久留米大学（100号館3棟2F比較文化研究所会議室、ゼミ室）

③タイムスケジュール

- | | |
|-----------------|-------------------|
| (1) 9：30～ 9：50 | 受 付 |
| (2) 9：50～10：00 | 開会挨拶（比較文化研究所 会議室） |
| (3) 10：00～12：00 | 研究発表4演題 |
| (4) 12：00～13：00 | 昼 食 |
| (5) 13：00～16：00 | 研究発表5～6演題 |

(6) 16:00～16:10 閉会挨拶（比較文化研究所 会議室）

④発表形態

1人20分（口頭発表15分 質疑5分）

2～3演題毎に座長を交代する（1座長：1時間程度で時間調整）

演者の他に、座長、時間係、ベル係を置く（座長、時間係、ベル係は、研究員で行う）

3) 発表演題一覧

平成21年度 比較文化研究所 研究員研究発表会

演題一覧

第1会場：100号館3棟2F 比較文化研究所 会議室						
NO	役割	発表者	演 題	時 間	専門	指導教員
グループ①	1 座長②	胡 蔽	中国における信用担保制度の現状再調査	10:00～10:30	法学	宗岡 嗣郎
	2 時間・ベル②	佐田 亜紀	地方でつくられた「天神縁起」に描かれた絵	10:30～11:00	文学	江頭 肇
グループ②	3 座長①	幣旗佐江子	『雨月物語』『蛇性の姪』真女子像を求めて	11:00～11:30	文学	江頭 肇
	4 時間・ベル①	顧 紅英	太宰治文学における「愛」の構造 ～男性原理への反逆～	11:30～12:00	文学	江頭 肇
昼休み						
グループ③	5 座長④	橋口 公子	『平家物語』巻第九「知章最期」に見る知盛	13:00～13:30	文学	江頭 肇
	6 時間・ベル④	何 啓華	明治時代における国語掛図教育 ～『小学指教図』を中心に～	13:30～14:00	文学	江頭 肇
グループ④	7 座長③	三浦幸一郎	日本人のルーツ	14:00～14:30	文学	江頭 肇
	8 時間・ベル③	藤島 法仁	支え合う関係を形成するシステムにおける民生委員の役割 ～鹿児島県A市B町を事例に～	14:30～15:00	文学	保坂恵美子
—	9 —	藤村 一郎	第一次世界大戦期の国際戦略をめぐる議論 ～アジア主義の諸相～	15:00～15:30	政治	張 国興

第2会場：100号館3棟2F ゼミ室						
グループ⑤	10 座長⑥	陳 宥蓉	主要国の廃棄物・リサイクル政策に関する考察	10:00～10:30	経済	藤田 八輝
	11 時間・ベル⑥	邵 丹	中国における経済・エネルギー・環境問題を考察するためのモデル開発と応用	10:30～11:00	経済	大矢野栄次
グループ⑥	12 座長⑤	阿古 拉	中国清時代の人口移転と金融ネットワーク「標号」に対する一考察	11:00～11:30	経済	大矢野栄次
	13 時間・ベル⑤	浦川 康弘	「流域学の構図」	11:30～12:00	経済	駄田井 正
昼休み						
グループ⑦	14 座長⑧	夏 広軍	旧三猪地方に置ける酒造業の製造技術と将来展望に関する考察 ～自然共生度からみる～	13:00～13:30	経済	駄田井 正
	15 時間・ベル⑧	阿 思根	中国と日本の差はここにある	13:30～14:00	経済	駄田井 正
グループ⑧	16 座長⑦	今村 義臣	情動刺激の強度と心理生物学的反応の関係を調べた予備的研究	14:00～14:30	心理	木藤 恒夫
	17 時間・ベル⑦	赤須 大典	集団同一視が自己評価基準や自己説明に及ぼす影響	14:30～15:00	心理	木藤 恒夫
グループ⑨	18 —	羽山 順子	地域の中高齢者に対する睡眠問題改善を目的とした生活習慣改善プログラムの効果	15:00～15:30	心理	津田 彰
	19 —	金 ウイ淵	多理論統合モデルに基づくインターネットを利用したセルフヘルプ型プログラムによるストレスマネジメント行動の変容ステージの評価研究	15:30～16:00	心理	津田 彰

—	20	—	岸川 郁子	日本近世漢詩文の研究 — 徂徠派文人腹部南郭の一考察 —	—	文学	江頭 肇
—	21	—	徳永 武将	真崎基三郎と二・二六事件の関係 ～ 軍内対立の再検討 ～	—	文学	江頭 肇
—	22	—	野村 知子	職業作家の誕生 — 作家における著作権認識の萌芽 菊池寛を例に —	—	文学	江頭 肇
—	23	—	朴 順伊	儒教文化と「孝」思想 — 日韓比較の視点から —	—	文学	江頭 肇
—	24	—	占部 匡美	日本語教育史における入門期教科書の基礎語彙研究	—	文学	崎村 弘文
—	25	—	羊 又夫	『茶経』本文研究の資料篇	—	文学	崎村 弘文
—	26	—	王 彦風	日本九州と中国北京大学生の消費生活に関する比較研究 — 日中大学生の収入と支出に着目して —	—	経済	駄田井 正
—	27	—	方 大年	The Redevelopment of the Commercial District with Korean Investment in Changchun, China	—	文学	堂前 亮平
—	28	—	謝 君慈	景観写真による言語描写法からみた幼児の「知覚地図」 — 福岡県の農村地域における 6 歳女児を事例に —	—	文学	堂前 亮平

*「No 9」及び「グループ⑨」の座長・時間・ペルは、各会場の担当教員が行う

*役割の後にある番号は、担当するグループの番号を示している

(文責 行實 鉄平)

5. 日誌 (2009年度)

2009年 (平成21年)

4月15日(水) 比較文化研究所運営会議

4月22日(水) 比較文化研究所会議

5月27日(水) 比較文化研究所運営会議

6月17日(水) 比較文化研究所会議

6月17日(水) 比較文化研究所運営会議

7月1日(水) 比較文化研究所会議

7月7日(木) 比較文化研究所協議会

10月18日(日) 「第3回 健康生きがいのあるまちづくりフェスタ

～つなごう！ふるさとの文化～」

10月21日(水) 比較文化研究所運営会議

11月9日(月) 比較文化研究所運営会議

11月10日(火) 比較文化研究所会議

12月7日(月) 比較文化研究所運営会議

12月15日(火) 比較文化研究所運営会議

2010年 (平成22年)

1月18日(月) 比較文化研究所運営会議

1月20日(水) 比較文化研究所会議

1月27日(水) 比較文化研究所協議会

2月12日(木) 比較文化研究所運営会議

2月15日(月) 比較文化研究所研究員研究発表会

3月9日(火) 比較文化研究所運営会議

※部会活動を除く

施設・設備

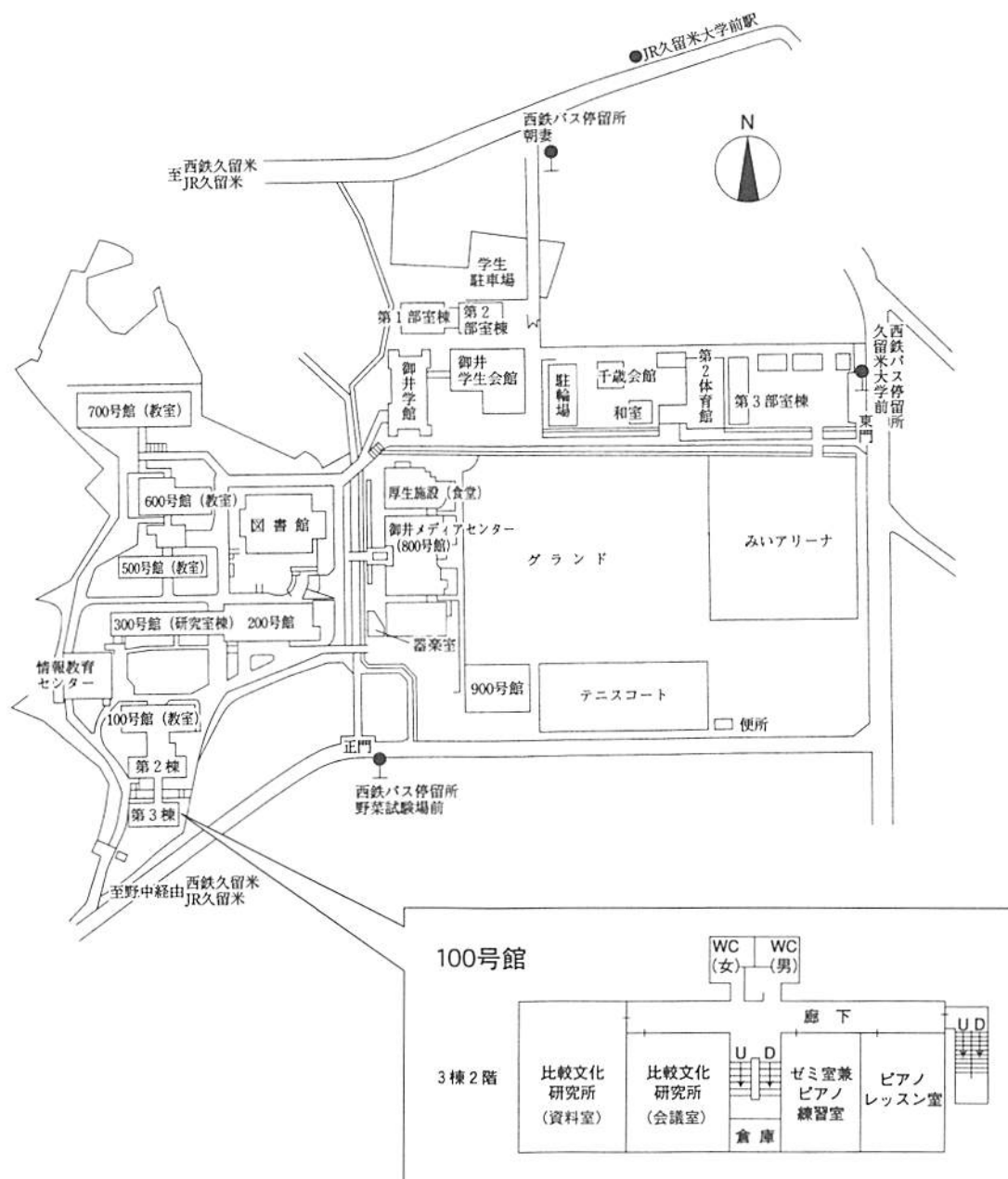
比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2006年に100号館の現在の位置に移動しています。研究所の部屋は2部屋あり、1部屋は会議・研究会に使用、他の1部屋は資料室および作業室として使用しています。なお、専任所員の研究室は、300号館にあります。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する膨大な図書が保管されています。これは、元サガテレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。

また、これらのほか、100号館1棟1階に、社会連携研究のための作業室や、文化財保存科学研究部会の実験室があります。



久留米大学（御井学舎）比較文化研究所 案内図



久留米大学 比較文化研究所年報 第3号

著作権所有

不	許	複	製
禁	転	載	

平成23年3月14日 印刷 第3号
平成23年3月18日 発行

編集兼 久留米大学比較文化研究所
発行者 〒839-8502 久留米市御井町1635

印刷所 多田印刷株式会社
〒830-0037 久留米市諏訪野町四丁目2432